

ハンドボールにおける数的不利な状況でゴールキーパーに代えてコートプレーヤーを出場させる攻撃の有効性と危険性

— 選手交代に関する競技規則変更前後の比較から —

榎木 武士 (201311828、ハンドボールコーチング論)

指導教員：藤本 元、會田 宏、山田 永子

キーワード： 5対6、EURO、RIO、攻撃成功率、逆速攻失点率

【目的】

本研究では、世界レベルの男子ハンドボール競技における5対6の数的不利な状況でGKに代えてCPを出場させる攻撃について、選手交代に関する競技規則変更前（GKと同色のゼッケンを着たCPのみGKと交代可能）と変更後（いずれのCPもGKと交代可能）との間で比較し、この攻撃の有効性と危険性を明らかにするとともに、5対6の数的不利な状況における有効的な攻撃方法を考察することで、今後の自身の競技力向上と指導の際の一指針を得ることを目的とする。

【方法】

分析対象試合は変更前として2016年ヨーロッパ選手権（以下EURO）20試合118シーン、変更後として2016年リオオリンピック（以下RIO）11試合113シーンを用いた。分析項目は退場回数、攻撃回数、シュート数、攻撃成功数、ゴール数、7mT獲得数、ミス数、逆速攻失点数、攻撃成功率、シュート成功率、ミス率、逆速攻失点率の12項目であった。ゲームパフォーマンスをEUROとRIOで比較するために各生起数に関しては対応のないt検定を行った。各生起率に関しては χ^2 乗検定と残差分析を行った。また、分析項目と最終結果との間の関係を明らかにするために、EUROとRIOに分けてそれぞれ χ^2 乗検定と残差分析を行った。いずれの分析においても、有意水準は5%で検定を行った。

【結果】

①RIOはEUROに比べて、攻撃回数、シュート数、攻撃成功数、ゴール数、逆速攻失点数が有意に多かった（表1）。
②相手の防御はEUROではマンツーマンDFが多く、RIOでは5-1DFが多かったが、いずれもプレー結果との関連はなかった。
③EUROでは1対1による最終プレーは攻撃が失敗する割合が高く、ポストによるものは成功する割合が高かった。RIOでは1対1による最終プレーは攻撃が成功する割合が高かった。
④EUROではポストシュートは成功の割合が高く、ミドルシュートは失敗の割合が高かった。RIOではカットインシュートは成功の割合が高く、ミドルシュ

ートは失敗の割合が高かった。

⑤EUROにおいて逆速攻失点する割合は少ないが、RIOではシュート達成できず、ミスが起こった時に逆速攻失点が多く、ゴールした時に逆速攻失点は少なかった。

【考察】

本研究の結果から競技規則変更後、5対6の数的不利な状況でGKに代えてCPを出場させる攻撃は攻撃成功率も高く有効であるといえる。しかし、変更前と比べて逆速攻失点が約6倍に高まったという危険性をしっかりと理解していないといけな。近年、味方に2分間の退場が宣告された時の数的不利な状況の攻撃において、味方が戻るのを待つ時間稼ぎの攻撃ではなく、相手にプレッシャーをかけ、積極的に得点を狙うことの重要が増している。そのため、数的不利な状況でGKに代えてCPを出場させる攻撃を練習することは必要不可欠であるといえる。

【実践現場への提言】

逆速攻失点を防ぐ上で最も大切なことはシュート達成することである。ミスやターンオーバーによって相手にボールがわたってしまった時に、CPがGKと交代できず逆速攻失点するケースが多い。攻撃戦術を徹底することやGKと交代する人をあらかじめ決めておくことが必要であるといえる。

表1 攻撃様相

	EURO(n=118)	RIO(n=113)
退場回数	8.2 ±3.18	8.6 ±3.04
攻撃回数	5.9 ±3.47	10.3 ±2.28 *
シュート数	4.7 ±2.88	8.3 ±2.28 *
攻撃成功数	2.4 ±1.66	5.8 ±2.48 *
ゴール数	1.9 ±1.25	5.0 ±2.40 *
7mT獲得数	0.5 ±0.68	0.8 ±0.87
ミス数	1.2 ±1.05	2.0 ±1.18
逆速攻失点数	0.2 ±0.41	1.2 ±1.25 *
攻撃成功率	40.7%	56.6% *
シュート成功率	32.2%	48.7% *
ミス率	20.3%	19.5%
逆速攻失点率	3.4%	11.5% *

数値は1試合あたりに換算した値

* :p<0.05